



孤独ならくだ

真夜中。私は自宅のベランダで一人、心もとなく夜を眺めていました。私は月が好きで、晩になるとこうしてお祈りをするにしています。しかしこの日ばかりは一人じゃありませんでした。不意に明々とした月光を受けて、地割れを象った体毛の、淡い模様が目に入ったのです。私の隣にはいつの間にやらきりんが長い脚を折り曲げて座っているのです。彼はベランダの柵より遥か高いところまで首を伸ばしています。

「こんばんは」唇をまくりあげて彼は挨拶をしました。

「あなたは」私は突然のことに驚いて縮こまりました。

「わたしは、普段は遠いけれども近いところから来ました――さて」きりんは呆然としている私を一瞥すると咳払いをしました。「見てほしいものがありましてね」

夜空には半分欠けた月がぼっかりと浮かんでいます。

「あそこを見てください」きりんは私に目配せすると向かいの民家を首で示しました。

屋根には何かがいるようでした。人間ではない、馬か牛のような動物が屋根の上に上手に立っています。

「あれはらくだです」彼は言いました。

「どうしてらくだが」らくだは月が好きだったかしらと私は首をかしげました。

「彼も月を眺めているのですよ」

「らくだは砂漠にいる動物じゃないの」私は訊ねました。

「大抵は、そうですね」彼は思案するように言いました。「あのらくだは砂漠に住む強靱な生物とは違うのです」

「というと」

「本当は人間なのです。しかし孤独のためにあのような姿になってしまった。孤独は砂漠と似ているでしょう。あなたのように夜はお月さまにお祈りをしないと生きていられないのです」

「とんでもない」私は憤慨して言いました。「私は孤独ではないよ」

「そうですとも」ときりん。「けれどもお月さまに何かを委ねようとする人は、いかんともしがたい思いを必ず持っているものです。さあ、らくだをよく見てご覧なさい」

私たちはお喋りをやめて再び屋根の上のらくだに注目しました。彼は月をじっと仰いだまま身動き一つしません。月光に照らされた背中のこぶは遠方に臨む山脈のようでした。

どれくらいベランダに立っていたでしょう。私は眠たくなってきて大きなあくびを二つ三つしました。

「もうじきです」ときりんは言います。

重たい瞼をなんとか支えて私は待ちました。

やがて、らくだがぐっと首を反らすと、ほら貝を吹き損なったようななんとも侘しい音が響き渡りました。それは孤独な人の悲痛な叫びに違いありません。らくだは絶え間なく夜に鳴き続けます。夜空の絨毯の上で一際明るいお月さまに向かって。けれども月はらくだのむせぶ声には応えず、虚しく西の方へ傾いていくばかりに思われました。何千年も遠くにいる星々も、気ままに

瞬くばかりでちっぽけならくだには見向きもしません。それにお月さまだって黄色く輝いてられるのは、今は地中に潜っている太陽の光を反射しているからにすぎない、そう思うと私は深く心を打たれ、涙が滲んでくる気がしました。

「そうです」ときりんが頷きました。「彼は太陽が見られない。おひさまの明るい笑顔と対面するには、もう心から笑えなくなってしまったために。ですから、ああしてお月さまにお祈りを託し、おひさまに渡して下さるよう頼んでいるのです」

「でも——」私は心底らくだに同情して肩を落としました。「私は月と太陽が顔を合わせるころなんて見たことがない」

きりんは憂いをこめて言いました。「どうか気を落とさないでください。このような孤独な人は世間に溢れ返っているのですから」

「放っておけと言うの」私は非難しました。「あなたは冷たい」

「いいえ。わたしは温かいですよ」きりんは長いまつげが触れるほど顔を寄せました。「わたしはあなたが望んだからこうしてここに存在するのです」彼は私の額を鼻の頭でこづきました。

「呼んだ覚えはないよ」私は無然とした表情できりんを睨みつけました。

「わかっています」彼は首を振りました。「ですが、わたしたちにできることはそれこそ毎朝毎晩太陽と月にお祈りをするしかありません。寂しい人々をどうかお助けくださいと。とは言うものの、らくだは同情など欲していないでしょう」

私はきりんの宇宙のように黒い瞳を見つめることしかできませんでした。

「悲しいことです。わたしたちにはどうすることもできない。独ぼっちという感覚は少年や赤ん坊にだって備わっているものです。お母さんやお父さんがそばにいないとき、おもちゃが自分の言うことをきかないとき」

「そんな」夜風が私の胸を刺し貫く思いがしました。

「そのために」きりんは話を続けます。「心が空っぽでなにもできないとき、わたしたちには空があるのです」

「空？」私は沈んだ気持ちで問いかけました。

「ええ、宇宙です。宇宙はとてつもなく広く、暗い。宇宙こそ独ぼっちである。けれども宇宙には何もないようで何もかもがある。そしてわたしたちの内にも宇宙があるのです。私たちは宇宙を造ることができる。あなたが私を呼んだように。なんでもできるのですよ」

「本当かしら」私は訝しげにきりんの首筋に触れてみました。硬い筋肉は頼もしく確かなものでした。

「ですから、わたしたちは月を見るのです。こうして」

私たちは黙りました。黙って夜空を見上げました。さっきまであんなに高かった月も、西の空に隠れようとしています。らくだがもう一度、お月さまに別れを告げようと一声鳴きました。その声は地平線に届きそうなほどいつまでも尾をひいていきます。しわがれた悲しみを携えて。しかし、またそこにはどことなく歌らしい楽しみもこめられているのでした。星々はといえば月がいなくなると途端に赤、青、黄、紫の光をしきりに明滅させては親しげに私たちに語りかけてくるのでした。

「星が喋った」私は眩きました。

きりんはそっと長いまつげで瞬きをし、立ち上がりました。そして蹄で軽く床を蹴ると夜陰に姿を消してしまっただのです。

(了)